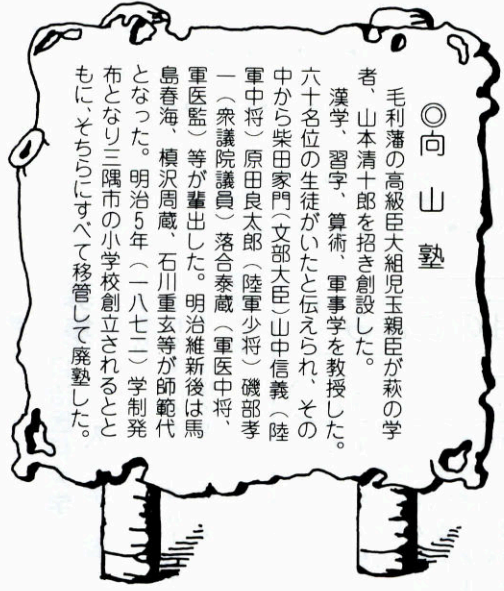
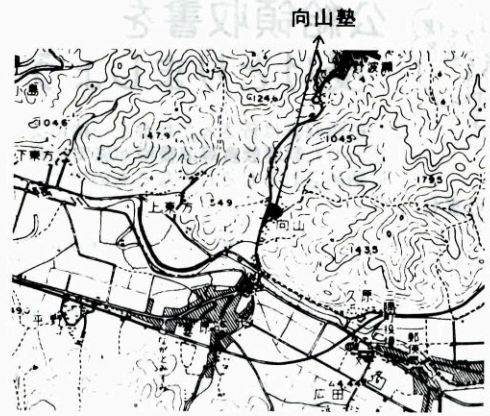


私のまちをふむふむが



◎向山塾

毛利藩の高級臣大相児玉親臣が萩の学者、山本清十郎を招き創設した。漢学、習字、算術、軍事学を教授した。六十名位の生徒がいたと伝えられ、その中から柴田家門(文部大臣)山中信義(陸軍中将)原田良太郎(陸軍少将)磯部孝一(衆議院議員)落合泰蔵(軍医中将、軍医監)等が輩出した。明治維新後は馬島春海、横沢周蔵、石川重玄等が師範代となった。明治5年(一八七二)学制發布となり三隅市の小学校創立されることも、そちらにすべて移管して廃塾した。

豊原から、三隅川にかかっているさざ波橋を渡って向山部落にさしかかると、その入口の山裾に小さな道祖神(さいの神)のほこらがある。ここから右へ小道を約五十米ばかり登って行くと、雑草が生い茂り、孟宗竹の群生しているところがある。

親臣は、幕末から明治への新しい将来を切り開くには、すぐれた人材による外はない。その為にはまずこれを育てる学校がどうしても必要であると考えたからであった。幸いにも、さきに村田清風先生が開かれた尊聖堂をここに復興しそこに祀られていた孔子の像をゆすり受け、尊聖堂の額を掲げ、清風先生の遺志を受けついで、専ら青少年を育てる目標とした。

塾で生徒に教授した学科は、漢学が主体であったが、それに習字と簡易な算術を加え、さらに親臣自らも、オランダ式兵式訓練を指導するなど、文武両面の教育に力を尽くした。この塾で教えた先生は、山本塾頭の外、馬島春海、横沢周蔵、石川重玄などがあり、折から時勢は幕府の倒壊から明治の新時代へとという一大転換期に当たっていたので教えるものも学ぶものも、ともに新しい時代への光明を望んで、師弟一丸となって、熱心に文武の道に励んだ。そのため、生徒の数も一時五・六十人にもなり、大津郡内のものでなく、豊浦、厚狭、美祢の諸郡などからも、わざわざ入学してくる者が多かった。

なお、寛政元年(一七八九)三隅市の福井仲達(医師・白藤氏の祖)が、付近の子弟を集めて開いた福井塾は、慶応三年(一八六七)当時の塾主で四代福井文忠が、この向山塾ができたので、考えるところがあった、塾生全員をこの塾に託したということである。

明治政府によって、新しい学校制度が定められ、三隅市小学がつくられたので、塾生一同はその方に移され、向山塾は廃止されたのである。

向山塾の開かれていた期間は短かったが、多くの有為な人材をうみ出した。

教授の石川重玄は、のちに静岡地方裁判所検事正をつとめ、塾生の中からは、次の人々が有名である。

- 柴田家門(文部大臣)
- 石部六郎(萩の人、岡山県令)
- 山中信義(児玉親臣の家臣・陸軍中将・男爵・貴族院議員)
- 原田良太郎(都農郡久保村の人、陸軍少将)
- 磯部幸一(衆議院議員)
- 落合泰蔵(陸軍軍医総監)

(附)塾の建物は、現在長門市境川の松岡豊雄氏(元小学校長)のお宅となっているとのことである。

文芸 清風句会

九月例会 (順不同)

笹百合やまだつぼみなり岩陰に
新盆や涙かくしぬ袖垣に

皆川よし子
終る命おしみてやまず蝉時雨
揺れ動く灯のなき燈籠とほしけり

大深 八重
松手入れすみたる庭の燈籠かな
上潮に流燈かろく打合ひし

岡 松月
取るなかれ余命幾許庭の蝉
稲妻に総立つ髪はまだ黒し

山中 重代
新涼や紺緋の女すれ違ふ

軒深し定紋燈籠明あかと
田村 九重
いとけなき孫の足うら夏座敷
英霊をはるかに偲ぶ墓灯籠
宮永ミネ子

海遊び名残惜しむ残暑かな
岩本さつき
背の孫と心とけ合ふ暑さかな

燈籠の火の海となる東行寺
野仏のホタルブクロを背に負ひ
宮垣、久子
扇山うろこ重ねて雲に佇つ

桐一葉大きく舞いて音もなく
上田 雪子
迎火に魂をみちびき蛾の舞へり
迎火のゆれて佛も孫も来る

笹見 梅雪
稲妻や光と音の間を数え
事務服の襟の白さや秋暑し

松野喜子雄
稲妻に峽の村邑露なり
かなかなに旅の一日の終りけり
滝口 旬一

稲妻や恐れて期待待ちぼうけ
都より残暑きびしと便り二度
池田 久子
野を蹴っていななく駒に稲妻ふる
骨立ちし手に残暑宛に病む

斎藤 元
稲妻の峽を覆いて地に牙ゆる
露の身の悔なく生きん宛は夏
山野たけ子
夕暮に精霊流し盆は近く
涼風に浜の香りがただよいて

仁保 民子
看護婦の一人残暑を姪れり
燈籠や怪談めきて闇の奥
因藤 兔史
漢者追吟
日盛りや磯松影を犬が守る
霊峰の祠はるかにお花畑

永田 石山